

67 ルネサンス絵画史上最高到達点の画家は誰か

ジョルジョーネの画面合成表現

2024

真鍋友範

1 ルネサンスの画家たち

ルネサンス期の画家たちにとっての最初の表現関門は、遠近法の取得にあった。

ルネサンス初期フィレンツェの画家パオロ・ウッチェロ（1397-1475）が、遠近法の黎明期に、その表現に熱中した話は有名だ。ただ現代人から見ると、いくつか表現上の破綻を発見するので、おそらく、当時は表現に苦労したのであろう。



《大洪水と終息》ウッチェロ

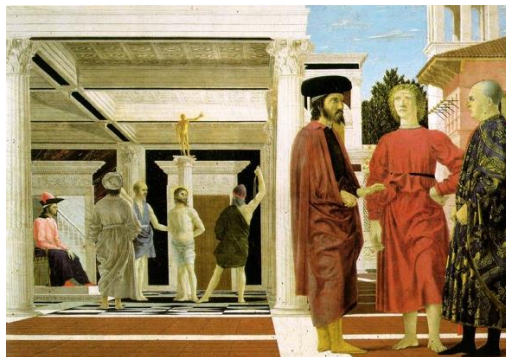
* 破綻した遠近法がシュールな空間を作っている。

また、結構上手に描いた画家であっても、明らかに遠近法が破綻している絵画を描いていた画家もいた。例えば、ルネサンス期の画家ピントウリッキオ（1454-1513）のフレスコ画では、遠近法表現の破綻が見られたりする。



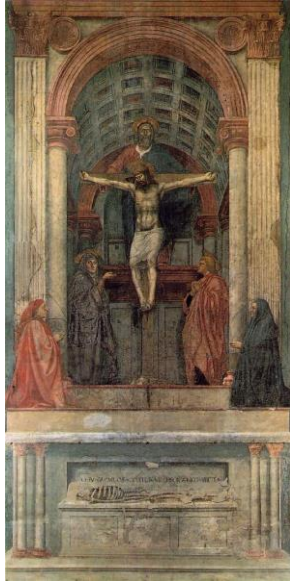
《議会に出発するアエネアス・シルウィウス・ピッコローミニ》
ピントリッキオ
* 消失点が目の高さの水平線上にない。

ピエロ・デッラ・フランチェスカ（1412-1492）のように、遠近法を用いた構図研究に没頭した画家もいたようだ。



《キリストの鞭打ち》ピエロ・デッラ・フランチェスカ
* 計算された構図で有名

フィレンツェ派の画家、マザッチョは、遠近法を確立した画家として、その後のフィレンツェ派の画家、フィリッポ・リッピやレオナルド・ダ・ヴィンチなどに対して多大な影響を与えている。



《聖三位一体》マザッチョ

* 遠近法を完成させた画家として記憶されている。

数多くのルネッサンス画家の中で、抜群の研究心で人体を構造から理解しようと努め、同時に、見る側の視線を誘導して重要な主題に視線を導く才能に長けた画家は、やはりレオナルド・ダ・ヴィンチだ。



《岩窟の聖母・ロンドン版》レオナルド・ダ・ヴィンチ

* 登場人物の頭部中心軸線と視線による観衆視線誘導が完璧に計画されている。

特に、観衆の視線誘導についての究極の研究成果として紹介できるのは、《岩窟の聖母・ロンドン版》と《最後の晚餐》だ。

(* ここでは、《岩窟の聖母・ルーブル版》はレオナルドの弟子たちが描いたと考えられる駄作なので除外する。)

さて、その視線誘導の実験とは、【屋外空間での人物を用いた視線誘導実験絵画】である《巖窟の聖母・ロンドン版》であり、【室内空間での建物の遠近法を用いた視線誘導実験絵画】の《最後の晩餐》だ。



《最後の晩餐》レオナルド・ダ・ヴィンチ

この時期のレオナルドによる、完璧な視線誘導画面への実験と執着が見て取れる有名な作品と言える。(詳しくは、web 論文《岩窟の聖母》2017参照)

では、数多いルネサンス期の画家の内、その頂点に位置する画家は、いったい誰なのか。一般的には、レオナルド・ダ・ヴィンチを挙げるのが正しいと考えられるかもしれない。

2 人の内面を描く画家・ジョルジョーネ

あえて私見を述べさせていただくなら、最高到達点に位置する画家とは、ヴェネチアの画家ジョルジョーネに違いない。



自画像 ジョルジョーネ

では、その理由を述べよう。

レオナルドが、ルイ 12 世のフランス軍が遠征したミラノを逃れ、新たな職を求めヴェネチアを訪れた際、若いジョルジョーネに出会う機会があったに違いない。

当然ジョルジョーネは、レオナルドにその表現力向上への根本的な姿勢を尋ねただろう。

当時のレオナルドは、手稿に次のような内容の記述を残している。

【優れた画家とは、人物の外のみならず、内面をも描ける画家である】

ジョルジョーネがこの言葉をレオナルドから直接の聞いたという資料は残っていない。しかし、ジョルジョーネの描いた後の作品には、忠実にその概念を形にした絵画が残されている。

その例となるのは、ジョルジョーネの一連の追悼画群だ。

3 ジョルジョーネの画面合成表現

ジョルジョーネの作品は謎が多いとされているが、それらの作品群は、【追悼画】という言葉で謎を解くことができる。

なぜ、ジョルジョーネの絵画が謎なのか、そして読み取ることが難解なのか。当時の貴族からの、各々の理由で発生した追悼画への需要であったこと、そして、ジョルジョーネの追悼画作品群は、ジョルジョーネ特有の【画面合成】によって構成されていることを理由として、読み取れないからだ。

【ジョルジョーネの採用した時空間合成表現】は、当時の描画常識からすれば、桁外れに近代的で、自由だ。

その例は、下記の 2 作品で証明できるだろう。



《ラ・テンペスタ》ジョルジョーネ

この作品は、ヴェネチアの貴族が、ジョルジョーネに注文した作品だが、見た通りに、この画面を解釈するのは、誤りだ。

敗北と死を象徴する折れた旗竿を持った貴族階級出身の兵士は、稲妻が光り、嵐の迫る空を見上げながら、故郷の家族を心配している。（* 男の顔が暗い色彩なのは、亡くなった人物であることを示している。）一方の母子は、遠く離れた故郷の町にいて、稲妻の音を聞きながら、遠い地点に出征した夫の安否を気遣っている。（* ビーナスで表現された妻も亡くなった天上人として示されている。）

これはヴェネチア貴族がジョルジョーネ工房に注文した追悼画の一枚だ。

本来は、遠く離れた2地点での人物の内面感情を合成表現した画面構成であることが特徴だ。

次のジョルジョーネ作品通称《人生の三世代》も難解だ。



《人生の三世代》：ジョルジョーネ

* この現在の作品名は、誤りと断定される。

驚かされるのは、この時代を超越したジョルジョーネの上記表現だ。この場面の3人が、この通り同時に存在していると考えるのは誤りだ。つまり、《人生の

三世代》ではない。この作品は、マニエリスム期の強い影響下で、過去に誤った題名が与えられている。

右側の二人は、イエスとその弟子。左端の高位聖職者は退位後のレオ10世だ。内容は、イエスが弟子を導いた教えに従い、自分（レオ10世）も民衆を導いていくとする強い意思を表現した宗教肖像画なのだ。

つまり、1500年の時間を超越して、別時代の人物を、同じ場面に画面合成している絵画だ。

この2例で充分に分かるように、ジョルジョーネは、場所や時間を超越した合成場面を自由表現できた近代的感性の持ち主であり、天才的な画家であったのだ。

4 レオナルドの後継表現者としてのジョルジョーネ

レオナルドは、人体の構造を科学的に解析し、完璧なデッサンに基づく斬新な絵画を表現し、ルネサンスに新しい一歩を加えた画家として輝かしい実績をもつ。

そのレオナルドの遂げた革新的表現から、さらにもう一歩絵画世界を近代的感性による、より自由な人間の精神内部の表現により、ルネサンス絵画は、更なる至高の境地へと導かれたと言える。

つまり、ルネサンスの絵画における最高到達点は、レオナルドではなく、ジョルとジョーネであるというのが本論の結論だ。